

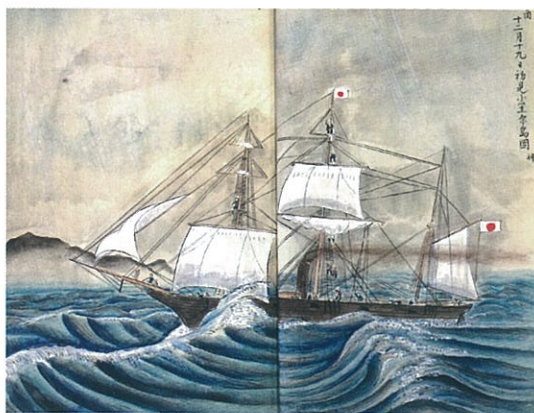
## Ⅳ 無人島から小笠原諸島へ

東京の南南東、およそ1,000 kmの太平洋上に位置する小笠原諸島。かつては無人島と呼ばれ、英語でも Bonin Islands (ボニン諸島) と表記されていました。しかし、19世紀に入り各国の捕鯨船が頻りに航行するようになると、薪水の補給地として寄島する機会が増えました。そのなかにはここに住み着く者もあり、幕末期には英米間で領有権争いも生じます。

こうした状況をうけて、幕府も文久元年(1861)末、外国奉行の水野忠徳らを派遣し日本領であることを宣言、実地調査の上で開拓・経営の意向を示しています。

幕末維新期の激動が一段落した明治9年(1876)、関係諸外国の承認を得て初めて日本の領有に帰し、当初は内務省が管轄、明治13年に東京府に移管されました。

ここでは、文久調査団が残した記録を中心に、描かれた幕末から明治の小笠原諸島のすがたをたどっていきます。

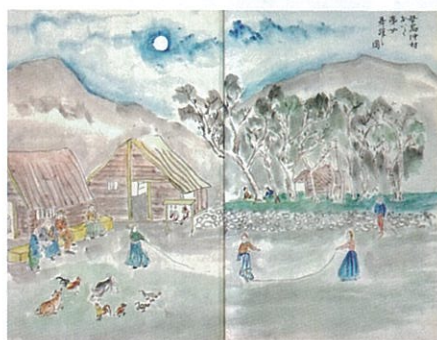


▲小笠原島記事十九 小笠原島を初めて望む



▲小笠原支庁・小笠原総合事務所 昭和43年(1968)6月開庁

▲(左)小笠原島記事二十 母島沖村にて外国人家族と交流  
(右)小笠原島記事十九 父島の内大村之図



## V 伊豆諸島と小笠原諸島の文化財

絶海の孤島。流刑地に指定されていたこともあり、島しょ地域に対するこんなイメージは過去の時代から続いてきました。

しかし、島々の文化を一覧すると、海を伝わる文化的ネットワークの広がりや古い時代から広範に展開していたことがわかります。たとえば、八丈島の湯浜遺跡からは本州の縄文文化との密接な関連性がうかがえ、南方系の石器類の特質が示されていると指摘されています。

また、度々見られた外国船の漂着や、国内各地から送られてくる流人との交流も、さまざまな生活風俗や生産技術をもたらす機会でもありました。

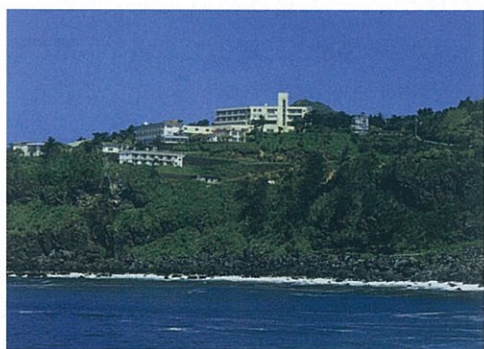
このコーナーでは、伊豆諸島・小笠原諸島の指定文化財の一部をご紹介します。



(左)板絵着色大森彦七図額  
多賀朝湖(英一蝶)筆  
(右)八丈島湯浜遺跡



▲英一蝶新島伝世資料「紙本着色恵比寿図」



▲倉輪遺跡(報告書より)

※予告なく展示資料を変更することがあります。予めご了承ください。

Izu Islands

平成30年度東京都公文書館企画展

# 東京の島々

## 伊豆諸島・小笠原諸島の歴史と文化

Ogasawara Islands